岡本綺堂顕彰事業
第二回 こども怪談コンクール

ぷち ぷち こわい はなし

入賞作品集

ご挨拶

勝央美術文学館　館長　神田寿則

当館の顕彰する、作家 岡本綺堂と、その養嗣子で岡山県勝央町出身の出版人 岡本経一。この父子にちなんだ「こども怪談コンクール　ぷちぶちこわい話―僕らは最高に怖い話を作ってしまったかもしれない―」は、今年第二回を迎えました。

岡本綺堂は、新歌舞伎を代表する劇作家で、瑞々しく江戸を描いた推理小説「半七捕物帳」等で広く知られています。しかし綺堂は、数多くの怪談作品を執筆し、現代でも「モダンホラーの先駆け」と評される怪奇小説の名手であります。このコンクールは、昨年の岡本綺堂生誕一五〇年記念展「奇譚の神様」の開催を機に、かつて岡本経一が尽力し設置された「岡本綺堂賞」の志を引き継ぐべく、子ども時代から怪奇に触れ「怪談」を心から愛した綺堂になぞらえ、全国の小中学生の皆様から「こわい話」を募るコンクールとして創設しました。

第二回となる本年は、全国から一〇一人の子どもたちに作品をお寄せいただきました。この作品集では、小学生の部・中学生の部において、審査を重ね選出された入賞作品一八点を集録しております。子どもたちの溢れる想像力や独創性、そして彼らが紡ぐ背筋が寒くなるような恐怖を味わっていただければと思います。

最後になりましたが、ご応募いただきました皆様をはじめ、コンクールにお力添えをいただいた小・中学校の先生方や、ご家族の皆様、審査にご協力いただいた本町教育相談員の皆様、最終審査をご担当いただきました東雅夫様に厚く御礼申し上げます。

目　次

岡本綺堂・岡本経一　略　歴　……4

選　評（こども怪談コンクール審査委員長　東雅夫）　……6

小学生の部

特　賞　ブリ　竹内　甫　勝央町立勝央北小学校　六年生　…7

優秀賞　盛り上がった土　白井　菫　大阪市立堀川小学校　三年生　…8

入　選　あの日のベランダ　ジュピジュピ　勝央町立勝間田小学校　六年生　…9

恐怖な自分　そわ　美作市立大原小学校　五年生　…10

シロコマカの呪い　竹田　杏奈　名古屋市立藤が丘小学校　五年生　…11

奇妙な人　武田　紀乃　総社市立総社東小学校　四年生　…12

私のことを拾ってください　ちーちゃん　勝央町立勝間田小学校　五年生　…13

佳　作　人形　川端　久温　勝央町立勝央北小学校　六年生　…14

ずっと見てるよ。　K　勝央町立勝間田小学校　五年生　…15

トイレの中　さーちゃん　勝央町立勝間田小学校　五年生……16
ようかいブックブック　長尾　瑛心　津山市立河辺小学校　二年生……17
おばあちゃんの家　中山　円　井原市立井原小学校　四年生……18

中学生の部

特賞　花牛園子さん　牛乳ぷりん　奈義町立奈義中学校　三年生……19
優秀賞　記憶の中の扉　庄司　真紀子　渋谷教育学園渋谷中学校　二年生……20
入選　神水鏡　棟方　有紀　仙台市立八木山中学校　二年生……21
お盆の朝　渡邉　一矢　大分市立碩田学園　中学二年生……22
佳作　写真　近藤　花　美作市立大原中学校　三年生……23
実家の家宝　ハルキ　白河市立白河第二中学校　一年生……24
第二回 こども怪談コンクール募集要項……25
審査委員長紹介……26

・集録した作品は、賞順・応募者名五十音順に掲載しています。

勝央美術文学館が顕彰する

作家 岡本綺堂と出版人 岡本経一 略歴

岡本綺堂（一八七二－一九三九）

明治5（一八七二）年11月15日（旧暦：10月15日）、東京・高輪の旧徳川幕府御家人の家系に生まれる。本名 敬二。幼い頃から漢詩や英語を学び、その語学力を、生涯の創作の材料として役立てた。東京府尋常中学在学中に、劇作家になることを決意。卒業後の明治23年入社の東京日日新聞社を皮切りに、様々な新聞社で記者・劇評家 として活動する傍ら、小説や戯曲を執筆した。

明治41年、川上音二郎に依頼され、二代目市川左團次の一派に「維新前後」を書いたのを機縁として、以降、左團次に当てて多くの戯曲を書く。「修禅寺物語」などの史劇、「鳥辺山心中」「番町皿屋敷」などの悲恋物は、新歌舞伎の代表的演目として、現在も上演されている。

岡本（森部）経一（一九〇九－二〇一〇）

明治42（一九〇九）年3月25日、勝間田町（現勝央町）岡に生まれる。旧姓 森部。

郡立勝間田尋常高等小学校卒業後、上京。同郷の劇作家 額田六福の紹介で岡本綺堂家の書生となる。子どものなかった綺堂夫妻は、実直な経一に岡本家の後を托し、昭和12年、経一は正式な養嗣子となり、最後の綺堂門下生として受け入れられた。

綺堂の死後、戯曲を対象とした文学賞「岡本綺堂賞」を立ち上げるも、太平洋戦争のため途絶。自らも応召され中央アジアにて抑留される。戦後、妻の疎開先である鳥取に復員し、岡本家の先行きを案じた六福に急がされ再び上京する。出版社〈青蛙堂書房〉を立ち上げるが倒産。綺

大正2年以降は執筆活動に専念。推理物『半七捕物帳』では、捕物帳というジャンルを創設するとともに、物語の中に江戸の情緒と風物を瑞々しく描き、また「モダンホラーの先駆け」と言われるほどの怪奇小説の名手であり、『青蛙堂鬼談』など怪奇物も長く読まれている。

後進の劇作家志望者を育てるため、昭和5年、雑誌『舞臺』（ぶたい）を創刊。門下には多くの作家が出ており、大村嘉代子、中野實、岸井良衛、北條秀司らの他に、勝央町出身の額田六福、下山省三がいる。

勝央町出身の出版人 岡本経一は養嗣子。

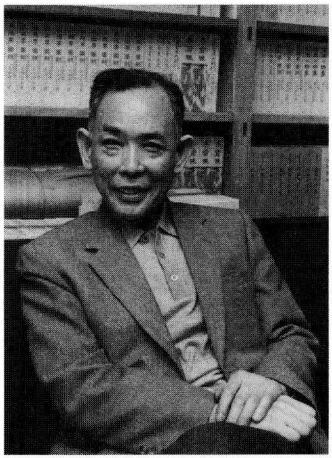
昭和14（一九三九）年3月1日 66歳で逝去。

堂の十七回忌の昭和30年に出版社〈青蛙房〉を再び立ち上げる。

本の製作では、企画、編集、校正をすべて自分で行い、昭和42年、江戸時代風俗研究書の出版活動が認められ、第15回菊池寛賞受賞。また、平成元年には、『岡本綺堂日記』、特に続編の「綺堂戯曲年表」が評価され、第24回長谷川伸賞を受賞。

「物を作るということに興味を持ち、創造することを愛し、そして後生へ良い物を残していく」という信念を持って出版業に取り組み、その業績は、日本のプライベートプレスの先駆けと評される。

平成22（二〇一〇）年11月15日 101歳で逝去。



選　評

こども怪談コンクール審査委員長
東　雅夫（文芸評論家・アンソロジスト）

昨年、大きな反響を呼び、たちどころに、第二回の開催が決まった、岡本綺堂顕彰事業の『ぷちぶちこわいはなし』こども怪談コンクール。その結果発表をお伝えする。

今年は、われわれ審査スタッフを大喜びさせるような想定外の結果が齎された。「小学生の部」の応募総数の飛躍的な増加である。これが、本当に小学生が書いた作品なのか⁉と驚かされるような、突飛で、不思議で、奇怪な物語が、数多く寄せられたのは昨年も同様だったが、今年は全体の数が増加したこともあってか、より一層、奇妙な作品が数多く寄せられた気がする。

その典型というべきが、特賞に輝いた竹内甫の「ブリ」だろう。ブリの寿司が好物という読者も多いだろうが、物語はすぐさま、妙な方向へと走り出す。ブリ好きのあまり、ブリしか食べない無気味な友人たち。そして唐突に登場する「ブリの着ぐるみ」をかぶり、冷凍ブリ（！）を振りかざして主人公に襲いかかる、謎の人物！一見、荒唐無稽なようでいて、実はブリつながりの奇妙な一貫性のあるストーリー！　似たような傾向は、「あの日のベランダ」「恐怖な自分」「シロコマカの呪い」「奇妙な人」などの応募作にも共通して認められる。

これに対して優秀賞の白井菫「盛り上がった土」は、史実に裏付けられた、綺堂先生のお手本を彷彿させる物語だった。突如噴出する水の、生々しい恐怖よ！

「中学生の部」も、数こそ少なかったが、年長者らしい落ち着いた文章で綴られていて、印象に残った。特賞作品は、お約束のオチだが、なかなか上手い。なぜ「花牛さん」なのか……考え出すといろいろ怖い。優秀賞の「記憶の中の扉」の抒情性も、得がたい味わいだった。空いたままの扉！

ブリ

竹内甫

僕の友達は、寿司が好きだ。
だから、月に一回ほど友達と一緒に寿司屋に行く。
僕は、マグロやサーモン、ハマチやカンパチを食べるが、友達は、ブリしか食べない。
（なんでブリしか食べないんだろう。）
僕は、最初の方は気にならなかったが、何回来ても、ブリしか食べないので、さすがに気味が悪くなった。
僕は、結局その子の友達をやめた。
そしてまた新しい友達を作った。
その新しい友達も寿司が好きみたいで、よく寿司屋に行っているみたいだ。
（まさかそんなことはないだろう。）
ある日、僕は友達に寿司屋に誘われて、一緒に寿司屋に行った。
僕はいつもどおりマグロやサーモンなどを食べる。
だが、その友達もブリしか食べない。
何回来ても、やっぱりブリしか食べない。
僕は、またその子と友達をやめた。
そして、もうそのことが怖くなって、自分の部屋に閉じこもることにした。
自分の部屋に閉じこもるようにして二ヶ月ほどたったある日の夜、急に自分の部屋のドアをノックする音が聞こえる。
（ドンドンドンドンドン。）
僕は、親がノックしても怖いからドアは開けないようにしている。
だが、二十分ほどたっても、ノックする音が消えない。
（誰なんだろう。でも出たら絶対にヤバい。）
そして、急にドアが開いた。
そこから出てきたのは、ブリのきぐるみをきた誰かだった。
僕は、その誰かに冷凍されたブリで叩かれた。
そして、意識不明の重体になり二ヶ月ほど入院した。
その後、僕は無事退院して家に帰った。
だが、あの夜冷凍されたブリで叩かれたことを全く忘れることができなかった。
（あれは本当に誰だったんだろう。）
僕は、その日から全くブリを食べなくなって、ブリが食卓に出てきても怖くなってひきこもるようになってしまった。

盛り上がった土

白井 菫

セミが鳴き始めたある暑い日、Aさんは友人のBさんと一緒に校庭の花壇に百日草の苗を植えていました。穴を掘っていると、もこっと土が盛り上がってきました。不思議に思ってそこをさらに掘ってみると、

「ワッ」

そのとたん顔にバシャーンと水がかかってきました。ビックリしてAさんは思わず尻餅をついてしまいました。さらにどんどん水が噴き出てきます。

「怖いよ、先生に言いに行こう。」

とBさんが泣きそうな顔で言いました。走って教室へ向かったAさんとBさんは、

「たくさん水が出てきたっ！」

と慌てて先生に伝えました。

先生は、急いで花壇のある場所まで行こうとしましたが、水はピロティーのところまで来ていました。

「こ、これはまずいっ！」

真っ青な顔で先生は校長室へかけていきました。先生の焦っている姿を見て誰かの「にげろ！」と叫ぶ声が響きました。みるみるうちに水がひざ下まで上がってきていました。驚いたAさんとBさんは、水をかき分けて教室から階段まで逃げようとしましたが水の流れはどんどん強くなり、ついにはAさんの顔にまで水が上がってきてしまいました。

（もうだめだ）

と思ったその時・・・

〝キーコーンカーコーン〟

とチャイムの音が聞こえてきました。するとAさんは、保健室のベッドの上で寝ていました。先生から事情を聞くと、Aさんは穴を掘っている最中、熱中症になって倒れたところをBさんが見つけて保健室まで届けてくれたらしいのです。

Aさんは、夢の中で穴を掘っていたら水が噴き出してきた事を先生に話すと、

「昔、大塩平八郎の乱の後、豊臣秀吉が荒れ果てた町の復興と焼け出された人たちを助ける為に大川から堀川の流路を掘らせたという歴史があったんだよ。それがちょうどこの小学校の下辺りがルートだったのかもしれないね。」

Aさんは、その話を聞いて自分の小学校の歴史に興味を持ちました。

もしかしたらあなたの小学校にも不思議な歴史があるかもしれませんね。

あの日のベランダ

ジュピジュピ

私は、勉強がきらいな小学6年生の女の子。勉強がきらいな私は、よく授業をぬけ出して、ベランダで空を見ていた。だけど、あの日のベランダは、何かおかしかった。

その日もいつものようにぬけ出して、ベランダに出た。だけど、いつものベランダとは何か違うような気がした。けれど私は、気のせいだと思って過ごしていた。5校時目のと中で、ベランダに行った。その時、だれかがとなりにいたことに気づいた。名前を聞いても何も言わない。無言のまま。すると、次のしゅん間、その人が飛び降りた!私は、びっくりしてさけんでしまった。そしたら後ろから、

「何をしているの!」

という声が聞こえた。先生だ。私は先生に、今起きたことを話した。すると先生は、

「何を言っているの?だれも下にいないじゃない。」

と言った。私はびっくりして下を見た。けれどもだれもいない。確かにだれもいない。だったら、今さっき私が見たものは何だったの?と思いながらも、私は家に帰った。

家に帰って、学校で起きたことをお母さんに話すと、

「そういえば、お母さんもそんな体験をしたわ。」

と言った。私は気になってお母さんに、

「そのあとは?」

と聞いたが、お母さんはだまったまま。

次の日の朝、お母さんがいなかった。その次の日も、そのまた次の日も・・・。私はしびれを切らして、お父さんに聞いた。

「ねぇ、お母さんは?」

すると、お父さんはびっくりしたような顔をして、

「今まで、お母さんなんていなかったじゃないか。」

「えっ・・・?」

私はびっくりして、声も出なかった。だったら、あの日の人はだれなの! なぞは、いくら考えてもわからない。だけど、これだけはわかる。すべては「あの日のベランダ」から始まったことだと。

恐怖な自分

そわ

私の名前はさくら

私は友達を連れて図書館にいきました。

私は、算数の小数の掛け算の筆算の本を借りました。
友達が借りたのは、呪える本です。
私は、言いました。「それ何に使うの？」
友達は言いました。「死ぬほど恨んでいる子がいるのだからそいつを呪うために。」
私が言う。「そんな人ほっといたらいいじゃん。」
友達が言う。「何ゆっているの、呪うやつはお前だよ。」
私が言う。「なんでよ私なにかした。」
友達が言う。「決まってんじゃん、もしかして忘れた？昔あんた私を学校の三階からつきおとしたんじゃない。ほんとうに忘れたの？あんた頭だいじょうぶ？ずっとあんたを恨んでいた。ずっと友達みたいな演技をしていた。もううんざりだから。」
私が言う。「それ私じゃない。」
友達が言う。「は？じゃ、だれだってゆうの。」
私が言う。「もうひとりのわたし。」
友達が言う。「は、意味がわからない。」
私が言う。「普通そうだよね。でも私自身がやったわけじゃない。私の心がやったのだからわたしはやっていない。」
友達が言う。「あなた顔色が悪い。」
私が言う。「もうちょっとだったな・・・・・・」
友達が言う。「やめて。」
私が言う。「バイバイ。」
友達「・・・・・・」

ニュースです
今日午前七時頃、十四歳の女性が遺体で見つかりました。
なにかの刃物でおそわれているこんせきです。
犯人はまだ捕まっていないそうです。
みなさんもじゅうぶんに気をつけてください。

シロコマカの呪い

竹田 杏奈

ぼくの母はなにかがおかしい。一週間ほど前からほぼ一日中ずっと不気味な笑みをうかべていた。仮面をかぶっているようだと、少しこわい。父は三年前に病気で死んだから、たよれる人もいない。どうしようと考えながら、今日もいつもの道で下校していた。

あともう一つ、あれを読んでから、何かがおかしい。それは、一週間前、ぼくのクラスの五年四組に転校してきた健太という男の子の書いた作文の一部だ。

「ぼくの本名は、シロコマカです。毎年同じ名前の人を殺します。三回殺したら、他の名のターゲットになります。ルーレットです。」

意味が分からない。シロコマカという名前そんなにいないだろ。じゃあ三回殺したら、自分が他の名になるのか。いつも考えてしまう。背中がゾッとする。

そんなことを考えていたら家についた。左を見ると、ニヤニヤしながら母が、夜のご飯を考えていた。もういやだ。家出しようかな。そう思いながら、他の事を考えようとした。あっ。そういえばもうすぐ夏休みだ。あと何日か数えようとしてカレンダーを見た。今日はいとこの父のそうしおじさんが死んだ日だ。ぼくと同じ名前なんだ。

夜ご飯を食べて、寝室に行こうとした。すると、かまを持った母が立っていた。グサっとにぶい音がして、意識がもうろうとした。

やっと気づいた。母にはシロコマカくんが取りついていた。シロコマカを反対から読む。カマコロシ。そうだ昨年はぼくと同じ名のそうしおじさんが死んだ日だ。三回同じ名の人を殺す。年に一度だ。シロコマカは言った。

「やっと気付いたね。お気の毒さま。ハハハッハハハッ。なんておもしろいんだろ。ぼく人間じゃないんだよ。次は君の三年生の友達のそうしくんだよ。ハハッ。」

ぼくは意識が途切れた。人生が終わった。

「次の次はあなたの番かも。ハハッ。」

奇妙な人

武田 紀乃

今から百年ほど昔のある小さな村に、六郎という名の男がいました。

六郎は、髪結いの仕事をしながら一人で暮らしていました。そんなある日、仕事を終えて帰る六郎の姿が目撃されたのを最後に消えてしまったのです。近所に住んでいた者が家を訪ねても人がいる気配がないので村の人たちは、「六郎は、神隠しにあったのだ。」と言って、恐れていました。

六郎の店の近くで、反物を売る仕事をしている、仲の良かった一蔵は、神隠しなど信じていなかったので、六郎と同じ道を通って帰れば何かわかるかもしれないと思い、同じ時刻に同じ道を通って帰ってみました。道を半分も行かない辺りにある、深い森に差し掛かった時でした。突然、木の上から、

「止まれ。」

という、低くしゃがれた声が聞こえました。一蔵は、空耳だろうと思い、また歩き出すと、

「止まれと言ったのが聞こえなかったのか。こんな風になりたくなければ止まれ。」

という声がまた聞こえ、それと同時に重たいものが落ちてくるような音がしました。ふりむくと、手も足も首もばらばらになった六郎が落ちているではありませんか。一蔵は、声にならない悲鳴をあげました。逃げたいのに足が動かないのです。それを最後に、一蔵は意識を失いました。それ以来、一蔵と六郎を見た者はいないということです。そして、不気味だからと引っ越す者や、二人の行方を探しに行っていなくなる者が後を絶たず、とうとう村には人がいなくなってしまいました。

二十年ほどたちました。あの小さな村から引っ越して来た人が多く住む町に、奇妙な人が現れました。この人は、顔は男、両腕は女、両足は子供というように、ばらばら人間だったのです。六郎を知っている者たちは、その人の姿を見て震えあがりました。なんとその顔は六郎のものだったのです。

私のことを拾ってください

ちーちゃん

ある日のこと、クラブで遅くなった女の子が、早く家に帰るために、近道の草むらを通って帰ろうと思った。その草むらは、よく友だちと行っているので、行きなれている道だ。女の子は、急いで駆け足で草むらを通りすぎようとしたとき、ふと気配を感じた。それは「拾ってください」と書いてある一つのダンボールだった。気になって箱をのぞいてみると、鎖に繋がれた片腕を見つけた。女の子は気味が悪くてそこらへんにあった木の枝を投げてみた。片腕はその木の枝を拾い、自分の絵を描いた。

「えっ、けっこう絵を描くのうまいじゃん。」

私は思わず口に出した。私はカバンに入れていたスケッチブックと鉛筆を出した。片腕は文字を書き始めた。

「絵を描かせてくれるだけでけっこうです。なので拾ってください。」

その言葉に女の子は、「まっいっか。」と思った。

そしてこっそり家に持って帰って、絵を描かせてみた。そして、その絵をネットに上げると、こんな声が上がってきた。

「あれって、死んだはずの画家じゃない？」

「え、これって、あの死んだ画家じゃん！」

そのコメントにゾッとした。「まっいっか。」女の子はそう思い、そのまま絵を描いては、ネットに上げるということをやり続けた。

ある日のこと、いつものように絵をネットに上げようとすると、突然本棚が揺れて、倒れてきた。すると、腕が挟まれてしまった。女の子は助けを求める人がおらず、困っているときに片腕がいることに気づいた。

「ねぇ、助けてよ。絵は思う存分に描かせてあげたでしょ。だから助けてよ。ねぇ。」

「嫌だ。私はあなたのために、絵を描いてきたんだよ。」

「ねぇ、お願いあなたの願いも聞くから。」

バン・・・大きな音がした。

そして一年がたって中学生になった。

「ねぇ、はるかって絵上手いね。」

「えっそんなでもないよ。」

まぁこの腕はあたしのではないけど・・・だって、あいつの夢を叶えた代わりに・・・・・・

人形

川端 久温

私の家には、いくつかの人形が和室にかざられています。私の妹は、そのいくつかある人形が可愛く見えるらしく、絵を描くことが好きで絵が上手な妹は、毎日のように人形の絵を描いていました。

ですが、私にはとても可愛いようには見えません。むしろ、不気味に見えて仕方ありませんでした。私は、あまりその人形が好きではないので、和室に入ることがほとんどありませんでした。

ある日、妹に引っ張られ、私は妹の部屋に連れて行かれました。すると、妹は人形の絵を指さして、真っ青な顔で

「ねぇ、人形の髪の毛ってのびるものだっけ？」

と聞いてきました。（そんなわけないでしょ）と思いながら絵を見てみました。すると、日に日に真ん中の人形の髪の毛だけがのびていました。妹のかき間違いでもあったんじゃと思い、和室に行っていました。すると、真ん中の人形は昨日描いていた絵よりも髪がのびていました。気味が悪いと思い、妹にも当分和室に行かないようにしろと言っておきました。さらに奇妙なことが起きたのはその晩からでした。

父も母も寝た頃に毎晩、人形が一人で移動しているかのように妹の部屋の前に立っています。もちろん髪ものびながら。もどしても、晩には必ず妹の部屋の前に立っています。父も母も人形を動かしていないのに。そんな奇妙なことが二週間ほど続き、その次の日に、妹は冷たくなっていました。人形は妹のとなりにいました。誰かに殺されたあとがなく、自殺に使われたものも不明。死因は不明でした。

おそう式が終わり、家に帰って人形を見ると、人形の髪の毛は元にもどっていましたが、人形があったのは、私の部屋の前でした。

ある四人家族が死因が不明で一人ずつなくなっていくという事件が発生した。なくなった方の近くには人形があるらしい。死因不明の事件が多発し、一〇〇人ほどの死者が出ると、事件も人形もなくなっていました。

ずっと見てるよ。

K

私の実家は、田舎の中でもずっとずっと山の奥の方にある一軒家だ。買い物しに行くのも一時間はかかる。だから畑や田んぼを使ってなるべく買い物に行くのを減らす事をしている。だけど小学校に行くのも五十分はかかるので、車で学校に通っている。お母さんとお父さんは、会社に早く行って遅く帰っている。なので私が学校から帰るときは、毎日近くのバス停までバスで帰っている。

家に帰ったら、冷めたご飯がおいてあってそれを温めなおして食べている。もちろん家には私一人だけ。おばあちゃんとおじいちゃんは、私が生まれて四歳のときに他界した。だから一人で温めなおしたご飯を食べる。お母さんやお父さんが帰ってくるのは十二時ごろだから、朝しか母さんたちと会うことはない。

一人で寝る準備をしていると二階から「ドスッドンドンバタン」という音がした。なんだろう物が落ちたのかなと思ったけど、すべてものは押入れにしまっているので、落ちることはほぼないはず。おかしいなと思った私は、二階に行った。もうさっきの音はしない。音がした部屋に行くと、見たことのない女の子の古い人形があった。私は、その人形を見てこう思った。人形には魂が宿るというけど本当なの？私はその人形を手に取り、一階へ持って降りた。するとその人形の服の中から古い紙が落ちてきた。その紙の中を見てみると、おばあちゃんの名前となにかの文章が書かれている。私は、その中を見て分かった。おばあちゃんが大切にしていた人形だと。もう十時になっていたので寝た。

朝になった。人形は机の上にあるまんま。今日は土曜日だけど、お母さんたちは仕事で、いない。学校で出た宿題を済ませる。静かな部屋で私一人だけ。すごく暇な時間を過ごしていた。お母さんたちにあまり会えていないので少し寂しくなってきた。すると、「ずっと見てるよ。大丈・・夫あんし・・。」「何？」と大きな声で叫んだ。

人形には、優しかったおばあちゃんの魂が宿っていた。

トイレの中

さーちゃん

ある日、私は図書室で宿題をするのに夢中になり、気づくと私一人だけになっていた。急にもよおしてきたので、三階のトイレに向かった。私は早く済ませようと思いつつ、一番奥のトイレに入った。用を足そうとした瞬間、トイレの中から、ボコッ・・ボコッ・・という音が。股の間からのぞき込むと、私の方を見る視線に気づいた。

「キャッ!!」

飛びのいた私は恐る恐るもう一度トイレの中を覗いてみた。そこには、真っ赤な血の中にバラバラになった手のようなものが見えた。私は怖くなり職員室に駆け込んだ。先生が確認に行ったが、血のようなものはない。次の日から三階のトイレは使えなくなった。

一年たったある日、私は友達のくるみちゃんと図書室で宿題をしていた。くるみちゃんが、

「トイレに行ってくる。」

と言い残し、図書室を出ていった。・・・三十分経っても帰ってこない。嫌な予感がした。一年前の記憶を呼び覚ましながら、私は三階のあのトイレに向かった。

「くるみちゃん?」

と声をかけると、一番奥のトイレからうめき声が聞こえてくる。私は勇気を振り絞ってトイレの扉を開けた。そこには誰の姿もない。すると、あのときのようにトイレの中からボコッ・・ボコッ・・と音が聞こえてくる。私は中を覗き込んだ。その瞬間、トイレの中から突然手が出てきて私の首を締める。私は

「だれか助けて!」

と叫んだ。遠のく意識の中で誰かが私を呼ぶ声がした。

「かえでちゃん、しっかり!」

トイレに引きずりこまれそうになった私を先生とくるみちゃんが引き止めてくれたのだ。くるみちゃんは、三階のトイレに異変を感じて、職員室に先生を呼びに行っていたのだった。

私は、あの時のことが今でも本当の出来事かどうか分からない。用をたす時に、ボコッ・・ボコッ・・と音が聞こえてきたら、決して覗き込んではいけない。トイレの中からあなたを見ているかも。

ようかいブックブック

長尾 瑛心

みんな、ようかいブックブックの噂は知ってる？夜とは限らず昼間でも、ようかいブックブックは、日本中どこでも現れるらしい。

自分の好きな本を読むばかりして、時間を守らない子どもはいないかい。宿題をする時間に本を読み続けていたり、夜寝る時間を過ぎても自分勝手に本を読み続けていると、ようかいブックブックは姿を現します。ようかいブックブックは、時間を守らない子どもがだーーーい好き。お父さんやお母さんに、何度注意されても聞かない人の近くにこっそり隠れていて、突然おそいかかり、海に連れて行かれます。そして、海に引き込まれます。

でも大丈夫。ようかいブックブックは、話を聞いてあげると落ち着くようかいだからです。ようかいブックブックの話を「ほーん。ほーーん。」と聞くのがポイント。それか、拍子（表紙）木を鳴らせば1人で海に消えて行きます。ブクブクとね。

大丈夫大丈夫、こわがらなくても大丈夫。ちゃんと時間を守れば、ようかいブックブックは現れません。時間に気を付けて、本の世界をいっぱい楽しめばね。

おばあちゃんの家

中山 円

ある夏休みのお話。

女の子の名前はさくらちゃん。

さくらちゃんはおばあちゃんの家が大っ嫌いだった。理由は台所以外全部たたみの部屋だったり、ろう下や縁側の床がギシギシ鳴って怖いし、急な階段の手すりがと中で折れていて、おりるときにすごく怖かったからだ。お父さんは「気にするな。」と言うけど、さくらちゃんは「嫌だなぁ」と思っていたから、夏休みにおばあちゃんの家には行きたくなかった。でもおばあちゃんのことは大好きだったから仕方なくおばあちゃん家に行った。そうしたらその年の夏休みはいつもと違って、なぜかおばあちゃんの家にとまることになってしまった。

夜になって寝ているときに変な夢をみた。井戸の前に自分がいて、ふたを自分が開ける。そして水をバケツにくむ。その後知らない所のがれきの上を歩く。そこで目が覚めて、それが何だったのかわからなかった。

次の日も同じ夢をみて、同じところで目が覚めて、さくらちゃんは不思ぎに思いつつもその日も眠った。

その日は暗やみの中、たった一人でいるものすごくさびしい夢。そして「なんだ夢か・・」と目が覚めて、それから起こしにきたお母さんをふと見ると顔がない。そこでも目が覚め、また夢かと安心すると上から急に物がふってきてぶつかる直前でまた目が覚めて、また覚めて、また覚めて、何回めかと思い時計を見てもいつかと同じ時こく、どうしていいかわからなくなってふとんの中にもぐってやっと眠れたと思ったらお母さんに起こされる。顔のないお母さんが呼ぶ名前が聞こえない。

ついにさくらちゃんは自分の名前を忘れてしまって、どこまでがげん実でどこまでが夢かわからないまま何かにとじこめられたのだった。

そうしてさくらちゃんはやっとゆっくり眠れた・・・。

花牛園子さん

牛乳ぷりん

きっかけは、友人の家に手紙が届いたことからでした。『この手紙が届いたあなたは、三日後に五歳の花牛園子さんに出会うでしょう。その時に三つ願いを叶えてあげて下さい。決して怒らせてはいけません。怒らせたらその後ずっと園子さんに付きまとわれる様になります。園子さんに会いたくなければ、三日以内にこの話を知らない、三人の人に話しなさい。』いわゆる不幸の手紙です。友人は誰からの手紙なのか分からなかったそうですが、これで私は三人のうちの一人になりました。いえ、怒ってはいませんよ。私はもともとお化けなんか信じていなかったので。それに、もう周りの人間はこの話を知っていたのです。だから私は、『どうせ嘘。だったら三日後を無事に過ごして、四日目に皆に自慢してやろう』と思っていたのです。

でも、彼女に出会ってしまったのです。私は怖かったのですが、怒らせてはいけないので園子さんの願いを聞くことにしました。

一つ目の願いは『名前で呼んで』とのことだったので、私は「園子ちゃん」と呼びました。

二つ目の願いは『一緒に遊んで』だったので、私は一緒におままごとや、お絵描きをしました。その時にはあどけなく笑う彼女を見て恐怖心も和らいでいたのです。

ですが、三つ目の願いは『私と一緒に帰ろう』だったのです。私は何処に連れて行かれるのか分からない恐怖で逃げてしまいました。それからです。ずっと誰かに見られている気がする様になったのは。私は怖くなり三日以内にしなかった『誰かにこの話をする』ということを思いつきました。でも、誰がこの話を知らないのか分からなくて困っていました。そんな時に怖い話の募集を聞いたのです。この話を送れば審査の為に沢山の人の目に止まると思いました。そう、今この文章を読んでくれているあなたの様に・・・。

記憶の中の扉

庄司 真紀子

毎日私が寝た後に帰宅し、起きる前に出社するそんな仕事人の父が一週間もの休暇をとった。小学生であった兄は丁度夏休みだった。

「フランスに行こう。家族旅行だ。」

ある日父が珍しく早めに帰宅し私を含めて家族4人全員を集め言った。当時の私にとって普段中々会うことのない父と一週間も一緒にいられることはこの上ない喜びだった。しかし今考えてみるとこの旅行は彼なりの償いだったのだろう。家庭の一切を押し付けていた妻に対する罪滅ぼし。母の暗い表情が全てを物語っていたように思う。

次の週、私たち家族はフランスを訪れた。空港に着いてすぐ私たちはホテルに向かった。絵に描いたような一家団欒。私の中での母の笑顔はこの時見たもので止まっている。夕方になり、兄に連れられて私はフランスの街へ飛び出した。日が落ちかけているのにジメジメとしていた。排気ガスで蒸し返された大通りを避けて歩く内に気がついたら私と兄は一際目を引く大きな煉瓦造りの洋館の前に立っていた。周りには綺麗に手入れされた薔薇が生い茂り、荘厳な門扉が僅かに開いていた。

「入ってみよう。」

言い出したのは私か兄か今となっては覚えていない。ただ一つ言えるのはこの時私たちは館にどうしようもなく魅せられていた。そして門を押した。

そこからの記憶はない。忘れたのではない。本当に何も思い出せないのだ。青い顔をして洋館から逃げるようにして帰り道を歩く兄を見てどう思ったのかももう忘れてしまった。ただ兄に痛いくらい握られた手の感触は今でも鮮明に覚えている。その日の夕食中私は兄に今日あったことは誰にも話さないよう言われた。いつも通り兄の綺麗な笑顔で。

そして今、私はかの洋館を目の前にしている。記憶の中の門扉は今もなお僅かに開いている。

神水鏡

棟方 有紀

町に昔からある鬼切神社の裏に、鏡清水と呼ばれる直径二尺ほどの湧水がある。言い伝えでは神無月の満月の夜、この水面を反時計回りにかき混ぜて覗くと未来の自分が映るらしい。そう祖母が教えてくれた。

「でもよっ、どんなに怖い未来でも最後まで見なくちゃなんねぇぞっ。」

「何でよ。もし途中でやめたらどうなるっちゃ？」

「そうさなぁ、そんときは鬼に喰われるな。」

「いやだぁ、ばっちゃ、おどかさねぇでよぉ。」

その日から私は、鏡清水のことばかり考えていた。いよいよ明日が十一月の満月、

「ばっちゃ、明日は満月よぉ。」

「やめときなぁ、先のことは知らねぇ方が良いこともあるっちゃよ。」

「でもよぉ、私は知りてぃのさっ。」

祖母は何も応えなかった。その夜、私は意を決し、鏡清水の前に立った。きっと私の未来は明るい筈だ。根拠のない自信を胸に、祈る気持ちで神水をかき混ぜた。すると水面が鏡のようになり、映画でも観ているかのように、映像がうかんだ。希望する高校に見事合格、喜ぶ場面がまず映った。次に場面が変わり、言い争いをする両親、そして母が家を出ていく場面に私は混乱した。「かぁちゃん？」水面は波立ち、場面はまた変化した。「何だこれは？」すると頭の中で誰かが叫んだ。

「逃げちゃなんねぇよぉ。最後まで見るこっちゃっ、頑張れぇ。」

祖母の声だ、祖母が踏みとどまらせてくれた。再び水面を覗くと、私の両手は血で真っ赤に染まっていた。

「もうやめたい、ごめんなさい、誰か助けてぇ。」

気が付くと私は、鏡清水の横で倒れていた。どれくらい時間が経ったのか、私は自分の未来を最後まで見ることは出来たのだろうか？急に恐ろしくなった。未来を知った自分、今は絶望しかない。

「止めておけばよかった、いや待てよ、未来を変える方法はまだあるかもしれない。」

背後から気配を感じて振り向くと、祖母の姿に似た何かが立っていた。

「尊よぉ残念だ、けどようやくこの日が来た。」

お盆の朝

渡邉 一矢

僕が生まれる前、僕の母が独身の頃の体験談です。

母の実家では、お盆になると居間に白壇を作って仏壇にあるもの全部そこに移し替えます。他にも押入から木魚、お経の掛軸、上質な座布団を出します。盆入りの日は、休みなのに朝早くからその移し替え作業を始めるそうです。

その日は、よく晴れて朝から暑く、全ての窓を開けて網戸にしていました。居間横の廊下には、大きな窓の下のサッシ部分がベンチみたいに出っ張りがあって座れるようになっています。高台に建てられているので、長閑な地方都市の街並びが一望できます。

祖母が朝食の準備を、祖父と母が白壇の設置とお供え物の用意をする事になっていました。白壇の設置といっても、ダンボールを雛壇のように設えて白布をかける簡単なもので、重さに偏りが無いように仏具を置いていきます。

立ったり座ったり、中腰になって作業するので、母は汗だくで準備をしていました。いつからか窓際に気配があり、てっきり祖父だと思った母は顔を上げて、「サボってないで手伝ってよ！」と、窓際に向かって文句を言ったそうです。

そこには白いランニングシャツ、白いステテコ姿の白髪交じりの中肉中背の初老男性が、サッシに腰掛け景色を見ていたそうです。片足を組み頬杖ついたその姿は、自分の父そのもの。

けれど、次の瞬間。母の背後でガチャーン！と、すごい音。何事かと振り返った母は目を瞠りました。

そこには御盆に載せた物を全てひっくり返して、腰を抜かした実父の姿。母は状況が飲み込めないまま、反射的に窓際に視線を戻しました。

大きな音に窓際の人物も、居間の方に顔を向けていました。二人の注目を浴びる中、文字通り煙のようにゆっくりとその人は消えたと言います。

「今の…」と母が言葉を探していると、青ざめた祖父が掠れた声で「俺の親父だ。」と呟いたそうです。

遺影の写真には、縁側に座っていた人の顔が。

その年から、お盆の準備は祖父が率先して行っています。

写真

近藤花

私のおばあちゃんの家にはたくさんの写真が飾ってあります。大きな石が転がった坂やボロボロの自転車の写真などどれもおしゃれとは言い難く地味な写真ばかりです。ある日おばあちゃんに聞いてみると微笑みながら答えてくれました。

「これは私の思い出なんだよ。」

私はその時、昔使っていた大切なものなのかなと思いました。

翌年、おじいちゃんが階段から足を滑らせて亡くなりました。翌日のお通夜でおばあちゃんの家に行ったとき写真が一枚増えていることに気づきました。その写真は階段の上にボールがおいてある写真でした。その階段はおじいちゃんが足を滑らせたところでした。お通夜の夜、近所の人たちが集まって話していました。横を通ったときに話し声が聞こえてきました。内容は、最近事故死が多いということでした。二年前に亡くなったお隣のおばちゃんは車が横転して亡くなっており、五年前に亡くなったおばあちゃんの旧友のおじさんは自転車のパンクが原因で転んで亡くなったそうです。さらに聞いてみると、どれもおばあちゃんの家にある写真と関係のある死因でした。

私はあのときおばあちゃんが微笑みながら答えた理由がわかったのです。そしてその瞬間知ってはいけない秘密を知ってしまったのではないかと思いました。この秘密を唯一知っている私が次に狙われるのではないかと不安になり、おばあちゃんの家から急いで逃げ出したのです。しかし玄関で思いっきり転んでしまい、その直後頭を強打し意識を失いました。私が頭を強打した直後におばあちゃんの悲鳴と鳴き声とともにみんなの心配する声が聞こえました。

このときおばあちゃんは本当に悲しんでいたのでしょうか。心のなかでは喜んでいたのではないでしょうか。

次の日からおばあちゃんの家には玄関の写真が飾られるようになったのです。

実家の家宝

ハルキ

これは、僕が大学三年生の時体験した、奇妙な出来事です。

僕の実家には不思議な家宝がありました。小さな鏡、「想像」と書かれた紙が貼られた小さなお面、粘土で作ったような頭蓋骨の三品が入っている木箱を家宝として、一年に一度お盆の時期、その木箱に頭を下げる事を恒例行事としています。

でも、家族のだれも家宝の詳細について知らないのです。判っている事は、中国にルーツがあるらしい事と、お面は生きている人、頭蓋骨は死者（？）を表している事が分かっています。でも、どうしてうちが持っているのか、「想像」と書かれた紙は何なのか、だれも知らないのに、なぜか必ず拝まなければならない気がして、みんなお盆に頭を下げるんです。

大学三年生の夏、バイトやイベントが重なり、お盆に帰省できませんでした。少し遅れて帰省した日の夜、僕は父と晩酌しながらいろんなことを喋っていました。トイレに行きたくなり、用を足して茶の間に戻る途中に「あれ」はやってきました。

僕が庭に面した廊下を歩いていると、庭を何かが歩いているような音がしました。誰か来たのかと思い、庭を見に行きました。実家の庭は木が生い茂り暗く、内心怖かったです。庭に出て「あれ」が見えた瞬間、恐怖のあまり動けなくなりました。そこには体がドロドロに溶けたような、人間に似ても似つかない見た目をした生き物がいました。慌てて茶の間に行き、両親に今見たものを伝えました。

そこからは記憶があいまいなのですが、両親は僕があまりにも動揺しているので、翌日お寺の住職にお祓いをお願いしたそうです。そして翌日、気づいたらいつの間にか終わっていました。どうやら「あれ」の正体は例の木箱に原因があるらしいので、あの木箱はお寺に預けることになりました。

ところが、先日お寺に空き巣が入り、あの木箱がなくなったそうです。何も起こらなければいいのですが・・・

終わり

第二回 こども怪談コンクールへのご応募は次のとおりでした。

応募総数　101点（小学生の部 83点　中学生の部 18点）

第二回 こども怪談コンクール募集要項

応募規定

対　象　小学生・中学生

応募作品は、日本語で書かれた800文字以内の作品で、本人が創作した未発表のもの、1人1点に限ります。

応募方法は、Ｗｅｂ応募フォームからのデータ送信のみ受付。（※保護者による文字入力の補助は可とします）

持ち込み・郵送は受付しません。

※入賞作品を掲載した作品集を発行します。

注意事項

※入賞作品の著作権は、原作者と主催者に帰属します。

※入賞作品は、岡本綺堂顕彰事業に使用されることがあります。

※応募作品は、勝央町の出版物などに無償で利用できるものとします。

※応募作品に誤字がある場合、選考の過程で修正することがあります。

※選考についての問い合わせには応じられません。

※盗作、類似、流用等著作権にふれるものは審査の対象外とし、表彰後でも受賞を取り消します。

※応募フォームに記載された個人情報は、コンクールで必要な範囲のみで使用します。

募集期間　令和5年6月1日（木）～7月31日（月）必着

応募先　Ｗｅｂ応募フォーム（勝央美術文学館ＨＰリンクより）

審査委員長　東雅夫（文芸評論家・アンソロジスト）

発　表　令和5年10月上旬に勝央美術文学館のＨＰで発表。

※小学生の部・中学生の部、それぞれで優秀作品を表彰します。

表　彰　式　令和5年10月15日（日）勝央美術文学館で行います。

主　催　勝央町、勝央町教育委員会

審査委員長紹介

東 雅夫（ひがし まさお）

一九五八年、神奈川県横須賀市生まれ。早稲田大学文学部日本文学科卒。アンソロジスト、文芸評論家。「幻想文学」「幽」の編集長を歴任。一九八二年に研究批評誌「幻想文学」を創刊、二〇〇三年の終刊まで編集長を務めた。二〇一一年、著書『遠野物語と怪談の時代』（角川選書）で第六四回日本推理作家協会賞を受賞。近年は各種アンソロジーの企画編纂や幻想文学批評、怪談妖怪研究などの分野で著述・講演活動を展開中。ＮＨＫテレビ番組「妖しき文豪怪談」「日本怪談百物語」、同ラジオ番組「あやかしラヂオ」等の企画監修・協力にも携わる。舞踏家や能楽師らとのコラボレーションによる朗読公演にも取り組む。著書に『百物語の怪談史』（角川ソフィア文庫）『なぜ怪談は百年ごとに流行るのか』（学研新書）ほか、編纂書に〈文豪怪異小品集〉（平凡社ライブラリー）〈文豪怪談傑作選〉（ちくま文庫）〈文豪ノ怪談ジュニア・セレクション〉（汐文社）の各シリーズ、監修書に〈怪談えほん〉シリーズ（岩崎書店）ほかがある。二〇二二年、岡本綺堂生誕一五〇年記念アンソロジーを三冊上梓。「岡本綺堂生誕一五〇年記念展 奇譚の神様」「こども怪談コンクール ぷちぶちこわいはなし―僕らは最高に怖い話を作ってしまったかもしれない―」でそれぞれ監修と審査委員長を担当。

著者公式サイト「幻妖ブックブログ」http://blog.livedoor.jp/genyoblog-higashi/

―怪談又怪談、
こつちが幽霊に
なつてしまひさう―

綺堂

『綺堂年代記』より

岡本綺堂顕彰事業
第二回 こども怪談コンクール
ぷちぶちこわいはなし 入賞作品集
発行日 令和五年十月
発 行 勝央美術文学館
〒七〇九－四三一六
岡山県勝田郡勝央町勝間田二〇七－四
（〇八六八）三八－〇二七〇

——僕らは最高に怖い話を作ってしまったかもしれない——

勝央美術文学館
SHOO MUSEUM OF THE ARTS